

(別紙)

## 「花にまつわるちょっといい話」の入賞作品集

平成20年10月16日  
財団法人日本花普及センター

### 大賞 1作品

埼玉県 森屋俊一 「花直り、してみませんか？」

日本全国の彼氏の皆様へ 機嫌を損ねたお姫様を救うには花が一番の特効薬です。  
綺麗で女性らしい人ならバラ、元気に明るい感じの人ならヒマワリ、優しくて可愛い人ならチューリップ、しつとり癒し系の人ならかすみ草、なんてどうでしょう。  
仲直りに言葉はいりません。花直り、してみませんか？  
特別じゃない日に起こるいいことは、ちょっと特別。

### 優秀賞 全10作品

千葉県 上中直樹 「笑顔が咲いた」

会社帰り、同僚が開いてくれた誕生日パーティーで、両手いっぱい花束を贈られた。  
意外に恥ずかしいと、後悔していた自宅までの道のり。  
「おめでとうございます！」通りすがり、見知らぬおばさんに、ニコリと会釈をされた。「おめでとさん！」今度は、見知らぬおじいさん。「コングラチュレーション！」見知らぬ外国の人にまで。  
誕生日のことなんて、誰も何も知らない。けれど、みんなが祝ってくれたようでうれしかった。  
花は、笑顔の種を播いてくれる。

千葉県 宮崎みちる 「ダンディな父」

「百合かナンかの花束、買ってきてくれ」早朝、89才の父から突然の電話。  
仕事の帰りに花束を抱えて実家に寄ると、父はテレビのほうを向いたまま、そっけなく「母さんにやってくれ」と言う。  
「お誕生日おめでとう。これ、父さんから」母の大好きなカサブランカの花束を目の前に置くと、写真の中で微笑む母の頬が少し赤くなったように見えた。  
・・・妬けるなあ。母が天国へ旅立って8年。父は花のプレゼントを忘れない。シャイでちょっと我がままで、そして相変わらずダンディな父がまぶしい。

**東京都 嘉瀬かほる**

「ただいまー」夫が帰宅した。「はい、これ」手には小さな花束があった。  
「どうしたの?」「いいから」これだけで私は分かった。今朝のけんかのこと、謝ってくれたんだ。  
「ありがとう」と言って花束を受け取った時にはすでに許しちゃってた。  
花って不思議すごい。「ごめんね」も「ありがとう」も「おめでとう」もみんな伝えてくれる。  
贈る人ももらう人もハッピーになる、粋な笑顔作戦だ。

**神奈川県 星野利佳 「メッセージ」**

ようやく母娘の暮らしに慣れてきた。  
つつましさを穏やかさが包みこむ、母の日やクリスマスもたくさんの気持ちと細やかな品を贈りあう、そんな毎日がいい。  
だから、四十ウン回目の私の誕生日に花束が届いて驚いた。送り主は元夫。  
私が好きだと言った覚えのない花にメッセージも添えずに。ふふ。なんだかおかしくなってきた。  
そうか、私が好きな花すら知らなかったんだ、彼は。そうだね。私は妙に納得してしまった。  
お返しする?そう言えば、彼の誕生日っていつだっけ。娘が帰ったらきいてみよう、花言葉の意味も。

**神奈川県 山下綾子 「初めての花束」**

彼から貰った初めてのプレゼントは、大きな大きな花束だった。  
でもそれは、様々な色や種類の花がごちゃ混ぜになった、とても奇妙な花束。赤いチューリップ、ピンクのバラ、オレンジのガーベラ、白いユリ・・・啞然とする私に、彼は照れたように笑った。  
「君の好きな色も、好きな花も、分からなかったから。その中に一本でも、君の好きな花があるといいんだけど」  
そんな不器用な彼が、今の私のダンナ様。  
今では毎年、結婚記念日に、私が一番好きなピンクのバラの花束をプレゼントしてくれる。

**神奈川県 八木久恵**

社会人3年目の誕生日、会社に出社すると私のデスクの上から足下まで5月の季節の鉢植えの花で埋め尽くされていました。  
先輩が用意してくれたサプライズだったのですが、その日は一日中お花畑の中にいるような感覚で仕事をしたことを今でも昨日のここのように覚えています。  
私はお洒落大好きで、貰うのは花よりケーキより絶対ジュエリー!そう思っていたのですが、この日の感激を境に変わりました。  
自分が贈られてみて初めて花を貰う嬉しさを実感しました。この感激を伝えたくて私も花を贈ります。

**静岡県 青山葉子**

里帰り出産した時、友人がお祝いにチューリップを 80 本送ってくれました。カードには「祝！お母さん誕生」の文字。

赤ちゃんに服やおもちゃをくれる人は多いけど、私がお母さんになったことを祝ってくれるなんて、意外な贈り物が嬉しかったです。

小さな花びんに数本ずつ分けて飾るのがなんかもったいなくて、大きな花びんに生けました。

慣れない育児が始まって穏やかな気持ちでいられたのは、あのチューリップのおかげだと思っています。

**静岡県 本田 茂**

離れて暮らす母から二十二本のバラの花が届いた、その日は俺の二十三才の誕生日だ。

さっそく母に電話をした、「一本足りねえよ。でもメチャ嬉しかったよ、ありがとう。」

電話の向こう母は少し声を詰まらせながら「足りない一本は家にあるから、いつでも取りにおいで、枯らさないで待っているから」言葉にならない程泣いている。

そして今、俺は故郷の駅に降りて近くの花屋さんに立ち寄った。「すみません赤のカーネーションを四十九本ください。」

**佐賀県 中村希実 「桜」**

毎年春になると咲く桜。小さくて可愛らしいその花びらが散る風景は、季節はずれの雪が降るようで、心が躍る。

『桜の花びらが散るとき、地面に落ちる前につかまえると、幸せになれるよ。』誰かがこう言っていた。

私は友達と一緒に挑戦するのだけれど、意外と難しい。

必死に桜を追う姿や、転んだ姿がおかしくてお互い大笑いする。

笑って笑って、やっととれた時、「幸せって、こういうことを言うんだな。」と実感した。身近にある幸せに気付いた、春の一日。桜ってやっぱ素敵だな。

**長崎県 安田佳世 「花とともに」**

「これからもよろしく」深紅のバラの花束が届きました。結婚以来、毎年一本ずつ増えるバラの花・・・今年で 29 本目・・・美しく飾られた花を見ながらこれまでの日々を思い出し夫のやさしさに感謝します。

「ありがとう・・・私こそよろしくね」・・・花は見た目の美しさもですが、心に豊かさを与えてくれ、私達夫婦にとっては愛の潤滑油です。

これからも花に囲まれ心豊かな暮らしに役立てたいものです。

来年は 30 本・・・！楽しみ！楽しみ！

## 佳作 全10作品

### 北海道 津村美里

仕事が忙しく、彼からのプロポーズを断り続けていた彼女。

しかしメゲない彼いわく、「かぐや姫のようにつれない。ならいっそ、あの物語のように無理難題を為し遂げたら？」

折しも季節はじきに冬。「もしもピンクの雪が降ったら、結婚してくれる？」「もし降ったらね」

数日後、彼は彼女の頭上に、たくさんのコスモスの花びらでピンクの雪を降らせたそうです。

花束抱えたプロポーズもいりけれど、とてもステキで羨ましいと思った話でした。

### 群馬県 大島加代子

私の1歳の誕生日。父からのプレゼントは1本のひまわりだった。ひまわりのようにあかるい子でいてほしい。そんな願いのこもった1本だった。

そして翌年には2本、翌々年には3本と、歳の数だけひまわりは増え、高校生になる頃には抱えきれないくらい大きくなった。

そして今年の夏、20本のひまわりを手に父が言った。「ひまわりのプレゼントはこれで最後。これからは好きな人に贈ってもらいなさい。」

私は泣き顔を見られないよう、花束で顔を隠しながら言った。「お父さん以上にキザな男なんていないよ、まったく...ありがとう！」

### 神奈川県 加藤美恵子 「祖母のトルコギキョウ」

頑固な祖母は庭で育てた花をめったに手折らない人だ。「花の命を短くする権利は私にはない。」と。色とりどりの花が祖母の庭に咲き誇る。

ある日、外をうつつむいで通る青年がいた。彼は何か悩みを抱えている横顔をしていた。

祖母は急いで庭のトルコギキョウを一本手折って青年に渡した。彼は戸惑いながらもはにかんだ笑顔を見せ素直に受け取って歩いていく。

「花もね、人の心を穏やかに優しくさせることが出来れば、その生を精一杯生きた証しになると思うんだ。私も残りの人生をそう生きたいね。」祖母は遠くを見て言った。

### 石川県 西森茂夫 「交番の花」

警官として金沢市内の交番に勤務していたときのこと。

ある日、パトロールの道で鍔を拾った。生け花用のもので、名札がついている。

あまり無い名前だったので、電話帳を繰って架電してゆくとすぐ分かった。

交番に受け取りに来たのはK子という娘で、お礼にと花を生けてくれた。

殺風景な交番に花は彩りを添えて、同僚や来訪者にとても好評を得た。

K子はその後、毎週花を生けに来てくれるようになり、ときには私たちと話しこんでゆくこともあった。

私の永年連れ添う妻の名はK子という。

**愛知県 高橋千春 「とびきりの瞬間」**

離れた場所に暮らす義母へのプレゼントは、大好きなお花を送るのが定番になっています。

届くとすぐに、「ありがとう」とメールや電話をくれ、喜んでくれている様子がよく伝わります。

先日、久しぶりに義母の家へ遊びに行った時、お気に入りの写真が集めてあるアルバムを見せてもらう機会がありました。

旅行、たくさんの孫たちとの記念などなど、...その中に、義母がとびきりの笑顔でお花と映る写真が何枚もありました。

そう、その花は私からのプレゼント。いつもこんな素敵な笑顔で受け取ってくれたのだと分かり、感激しました。

**京都府 廣田晃士**

私は独身で40歳。ある時、禁煙を決断しました。1箱三百円のタバコを買う代わりに、毎日花屋で花の苗を買うことにしたのです。

毎日苗を買くと、どんどん花は増えていきます。増えれば増えるほど、花の管理や世話は大変ですが、土いじりは心も和むんです。

半年後には、家中が花だらけになりました。近所でも評判になって道行く人も立ち止まって私の家の庭を見ていきます。

そして、一年後、毎日通い詰めた花屋の店員の女性と結婚することになりました。今、私はたくさんの花に囲まれ、愛する女性と一緒に幸せに暮らしています。

**大阪府 瓦谷光男 「20年後の出会い」**

ある喫茶店で一輪挿しにオレンジ色のかわいい花が生けられていた。

傍らにいた人と何を話したかすっかり忘れてしまったのに、その花のことは頭から離れなかった。

それから20年近い月日がたったある日、花屋でかわいい花を見かけたからと娘が買ってきたのが何とあのオレンジ色の花だった。

サンダーソニアという名のその花は、記憶の中の色と変わらないみずみずしさで、今、私と娘の目の前で揺れている。そして傍らにはあの時と同じ人がほほえんでいる。

**兵庫県 内海 力**

この間、おじいちゃんと「花畑を見に行こう」と言ったのだが、おじいちゃんは反対。

「花なんて、興味ない」と言って、そのまま行かなかった。

だけど、敬老の日におじいちゃんに花をあげた。そうしたら、おじいちゃんはとても喜んでいて。

なぜかという、おじいちゃんは、孫にもらったプレゼントは嬉しいからだ。

あげて良かった～。

**兵庫県 吉岡有里 「花のある日」**

花を買って帰ろうかな 仕事帰りに思いたち花屋へ寄った 今日は何もない普通の日だ  
店を出た後 いいお酒が飲みたくなった そうだ見たいDVDもあった 花だけのつもりが散財をしてしまった  
だけど不思議といふ気分だ  
飾り気のない部屋に花は映える 今夜は夜更かしをしたくなった 花を見ると「私もつき合うわ」と言っている  
ようだ  
心地良さはお酒のせいだけではないだろう 「そうか今日は何もない日じゃなくて花のある日なんだ」  
私の一人言を聞いていたのか花は少し揺れた まるでウインクをしているように

**奈良県 中井和子 「花はその花のように」**

中学生の頃の私は消極的な自分に自信がもてず、明るく活発な友だちをうらやましがってばかりいた。  
そんなある日、母が私に言った。「バラの花は華やかで素敵ね。でも、コスモスやスミレも素敵。バラとはまた  
ちがった良さがあるもの。《花はその花のように咲いている》、和子は和子の良いところを大事にしなくちゃ」  
この言葉は心の奥にじーんと沁みていき、大人になった今も私を励まし続けている。